

宮沢賢治が創った「ケンタウル祭」の由来と意義

——短歌や「銀河鉄道の夜」とドイツ語・ドイツ文化との関わりをめぐって——

米地 文夫*・ウヴェ リヒタ**

要 旨

宮沢賢治の作品のなかでも最も有名なものの一つである「銀河鉄道の夜」の物語のなかに「ケンタウル祭」という不思議な名前の祭が登場する。物語の中心が星座をめぐる夢の旅であるため、この名はケンタウルス星座に因むものと考えられてきた。しかしこの名は賢治の若き日の短歌が初出であり、その内容や時期から星座には関係なく、ギリシャ神話の半人半馬の怪物ケンタウロスのドイツ語名ケンタウルをそのまま祭の名に用いたものであることがわかった。この時期、賢治は盛岡高等農林学校で馬の飼育管理とドイツ語を学んでおり、ちゃぐちゃぐ馬っこをはじめとする馬産地岩手の人と馬との祭から発想したのである。

また、キメラに関心があった賢治は人間の上半身と馬体の下半身をもつケンタウルを、理性と本能的欲望との葛藤に悩む自分になぞらえた。岩手と同じく、馬を祝福することで春の農耕の始まりに豊饒を祈るドイツにもある民俗を賢治はおそらく学び、若い男性としての高揚感をケンタウル祭と表したのである。のちに少年のための物語「銀河鉄道の夜」にこの名の祭を組み込むが、静謐な物語にはなじまず、結局は、削除されたり、「銀河の祭」や「星祭」という名が加えられて、ケンタウル祭のイメージは希薄になってゆくのであった。

キーワード

宮沢賢治、ケンタウル祭、短歌、「銀河鉄道の夜」、キメラ、ドイツ語・ドイツ文化

はじめに

「ケンタウル祭」という不思議な名前の祭が宮沢賢治の作品に登場する。広く読まれている「銀河鉄道の夜」の物語は、このケンタウル祭の夜の出来事という設定であるが、この名の祭は日本にも世界にも実在せず、賢治の幻想から生まれたものと考えられる。そして「銀河鉄道の夜」が星座を巡る夢の物語であることから「ケンタウル祭」の名はケンタウルス星座の名から名付けられたと一般には解されてきた。

しかしながら筆者らはこの祭りの名が星座名から命名されたという通説には検討の余地があると考え、時系列的に宮沢賢治の幻想世界構築の過程

を追ってみた。賢治の多彩な文学作品のなかでも初期のものは短歌であり、主として盛岡中学生時代と盛岡高等農林学校生時代、およびその間に挟まれる一年間の療養と模索の時期に詠まれている。それらの中には後年のよく知られた作品との関連をうかがわせるものもあり、その意味でも、これらの短歌は注目されることが多い。

この小論で我々は、賢治短歌の「ケンタウル祭」の名が、何に由来するのか、またそれがどのような意味を持つものとして彼の若き日の短歌に用いられたのか、について検討してみた。

その結果、1917（大正6）年春、すなわち賢治が満21歳、盛岡高農三年生のときの「ケンタウル

* ハーナムキヤ景観研究所

** 岩手県立大学共通教育センター 〒020-0193 岩手県滝沢村滝沢字菓子152-52

祭」の語の初出の歌におけるその祭のアイデアと名称は、「ちゃぐちゃぐ馬っこ」などの岩手の馬に関わる祭との関連が考えられるとともに、「ケンタウル」は半人半馬のケンタウロスのドイツ語名であることなど、ドイツへの賢治の傾倒を示すものでもあることがわかった。

短歌の「ケンタウル祭」の名は、ケンタウルすなわち人馬の持つ聖性と俗性、あるいは理性と情念との両面性を示すものであり、若き日の賢治の、男性としての躍動する生命感と本能的な欲望を抱える苦悩とをともに表すものであった。

I 「ケンタウル祭」初出の短歌とケンタウロス

1. 「ケンタウル祭」初出の短歌

宮沢賢治の文学的営為は、まず盛岡中学校生徒時代の短歌の創作に始まる。それは盛岡高等農林学校入学後にも続いており、その大部分は現在歌稿A、歌稿Bのかなり重複する二種の草稿として残されている。

その歌稿Aには、「大正六年四月」と記された一群の歌、すなわち賢治が盛岡高等農林の三年に進級して間もないころの歌群のなかに、次の歌がある。

わが麗しきドイツたうひよ (かゝやきのそらに
鳴る風なれにも来り)

歌稿Aは上記の歌を含め大部分が賢治の妹トシの筆写で、最後の方の一部が妹シゲと賢治自身の筆跡である。前半はブルーブラックインクで、後半は鉛筆で書かれている。

わざわざ「わが」と付して字余りにして詠ったドイツウヒは、賢治自身をナルシズム的になぞらえたものらしく、「かゝやきの／そらに鳴る風」とは異性を求める情念などの「風」、すなわち青春特有の高揚感を示すものであろう。

歌稿Bは賢治自身がブルーブラックインクを用いて筆写したもので、同じく「大正六年四月」と記された歌群に、上記の歌があるが、「なれにも

来り」とあった部分は、「なれにもきたり」といったんは仮名書きに変え、さらに次のように鉛筆で推敲している。またこの歌の下部余白に鉛筆で二首目が書き加えられた。

わがうるはしき／ドイツたうひよ／(かゝやきの
／そらに鳴る風なれにもきたれ。)

わがうるはしき／ドイツたうひは／とり行きて
／ケンタウル祭の聖木とせん

この二首目の歌が「ケンタウル祭」という語の初出である。

そしてこの「ケンタウル祭」こそ、賢治が造ったイーハトヴ、ボランの広場、ベーリング市、ゲーキー湾などの多くの洋風の固有名詞の最初の例なのである。

歌稿A・Bともに大正六年四月という記載のもとに、その年の4月以降6月までの歌が清書されているが、「わがうるはしき／ドイツたうひは」の歌は、桜を詠んだ歌の前におかれているから、盛岡の桜の開花期からみて、ドイツたうひの歌はおそらくそれ以前の4月中に詠まれている。ドイツウヒ¹⁾はクリスマスツリーに用いられるが、「とり行きて」などという表現から、12月というような遠い先の祭ではなく、おそらく4～6月ぐらいの間にケンタウル祭を設定したのである。

歌稿Aには無かった「ケンタウル祭」の歌が、歌稿Bで加えられたことを、賢治にとって重要ではなかったために省かれていたと考えるべきなのか、重要であると考えて追加したとみるべきかは、わからない。しかしながら、のちに「銀河鉄道の夜」で「ケンタウル祭」の語が登場することからみれば、後者ではないだろう。

なお、ドイツウヒについては、稿を改めて論ずることとし、ここでは次の諸点を指摘しておくに留めたい。

ドイツウヒ(ヨーロッパトウヒとも呼ばれる)は、①ドイツのシュヴァルツヴァルトの主要樹種で、近代になって日本北部に「独乙唐檜」の名で導入され、賢治が学んだころの盛岡高等農林学校

の学風がドイツやアメリカの北方性の農林業教育に範をとったものであったから、キャンパス内に多数植栽されていたこと、②モミとともにクリスマスツリーに用いられることを賢治は知っていたので、祭の聖木にふさわしいと考えたこと、③見事な円錐形をなすドイツウヒの樹型に賢治は魅力を感じていたらしいこと、④当時、賢治はドイツ語の学習に熱中しており、この樹のドイツを冠した名前にも特別な思い入れがあったであろうこと、などである。

2. ケンタウルスとケンタウロス

「ケンタウル祭」の名は星座をめぐる夜の祭として「銀河鉄道の夜」に出てくるので、ケンタウルス座という星座の名と関わって造られた名と考える人が多い。しかし「銀河鉄道の夜」以前にすでに賢治は短歌に「ケンタウル祭」を詠み込んでいるのであるから、原点に戻って「ケンタウル祭」の名を検討してみた。

星座名になっているケンタウルスはラテン語であり、そのケンタウルスはもともとはギリシャ神話に登場しケンタウロスという名の地上の怪物の名であった。すなわち、ケンタウロス Κένταυρος (Kentauros)²⁾ は、ギリシャ神話のなかに現れる半人半馬（馬の体の首から上が人間の上半身になっている）の怪物一族の名前なのである。

この怪物たちは、古代ギリシャ北東部テッサリアに住んでいた騎馬民族をもとにイメージされたものと考えられている。ラテン語では Centaurus ケンタウルスと呼ばれ、これを天文学では星座名としており、日本で星座名（学名）をケンタウルス座と呼ぶのも、これに従っている。

ケンタウロスはギリシャ神話においては勇猛、粗暴で、野蛮かつ好色のイメージが強い。人間の女性を力で襲い略奪する恐るべき存在で、ギリシャの農耕文明の世界を侵し掠る辺陲の遊牧騎馬民族の戦士への恐れが生み出した怪物である。上半身は人間の頭脳と弓矢や槍を操る腕を持ち、馬として疾駆する下半身を持つ怪物であり、神話

には男(牡)のみが登場する。つまりまさに男性的、雄性的な存在なのである。

欧米の人々の教養の基礎は聖書とギリシャ・ローマ神話にあると言われるが、彼らがケンタウロスと聞いてまず想起するのは恐るべき粗暴、野蛮な怪物であり、星座名を最初に想起する人はほとんど皆無といってよい。

ケンタウロスのイメージの代表的なものは、17世紀のイタリアの画家グイド・レーニの描いた「ディアネイラとケンタウロスのネッソス」（または「ディアネイラの強奪」）という油彩画で、ルーブル美術館の所蔵品のなかでも良く知られた作品である。これはヘラクレスの妻のディアネイラを捉え奪おうとする場面を描いたもので、のちに英雄ヘラクレスの最期につながる伝説として有名な話を題材にしている。

Ⅱ ケンタウル祭の名の由来とドイツ語

1. ケンタウル祭を星座名由来とする旧来の説

この歌稿Bの「大正六年四月」の歌に登場する「ケンタウル祭」の名は、「銀河鉄道の夜」の物語が、このケンタウル祭の夜の出来事となっていることで良く知られているが、この名はこの短歌と「銀河鉄道の夜」以外の作品には見当たらず、短歌の方はほとんど知られていないため、この名に関する論議の多くが「銀河鉄道の夜」との関連でなされている。

そのため、「銀河鉄道の夜」が星座巡りの列車の旅を主軸にしていることから、「ケンタウル祭」の名は南天の「ケンタウルス座」に由来するという見解がほとんどであった。例えば、草下（1975）は『ケンタウル』の祭はケンタウルス座のことで、外国にそのような祭のあることは知らないから賢治の独創であろう」と述べている。萩原（1994）は「ケンタウル祭」を「ケンタウルス座にちなんだ、賢治の造語」としている。加倉井（2008）も「ケンタウル祭」はケンタウルス座という「星座名にヒントを得た賢治創作の名称であろう」という。以上は従来の代表的な見解で、ケンタウルス座に

由来することは、いわば定説としてほぼ異論のないものになっていた、といえよう。

さらにケンタウルス座に加えて、いて座もケンタウロス族の一人、ケイローンに見立てたもので、彼はアルゴ船隊を率いたヤーソンを教育したほか、ヘラクレスに武術、アスクレピウスに医術、カストールに馬術、をそれぞれ教えるなど賢人として知られ、一方、ケンタウルス座のケンタウロスは、酒の神バッカスの養父の子であるフォーロウであるという（野尻、1977）。「ケンタウル祭」の名はこの両星座から名付けたという解釈もあり、例えば辻（2003）は「ケンタウル祭の名は、夜空に輝く二つの人馬の姿にちなみ」名付けられたとする。

しかしながら、星座名由来とすれば賢治がなぜケンタウルスの最後の「ス」を取ったことの説明がつかない。そのため、斎藤・藤井（1988）はケンタウル祭について「明らかに〈ケンタウルス座〉を想定しながら、作品はなぜか「ケンタウル」の語を用いている」と記している。

原（1999）は「ケンタウル」の名は「ケンタウルス座（Centaurus）の所有格『ケンタウリ（Centauri）』を受けたものであろう」³⁾と解したが、なぜリをルに変えたかは説明していない。

もちろん、「ケンタウル」が「ケンタウルス」の誤記であるとも考え得るが、「銀河鉄道の夜」においても繰り返し「ケンタウル」を用いていることから、誤記ではないと思われ、賢治が「ケンタウルス」と書いている箇所が「銀河鉄道の夜」に一箇所だけあることは、これは他に理由があるか、あるいはこの方が誤記であると考えることができるのである。

このように、これまでは、ケンタウルス星座の名を基に、賢治が新たに「ケンタウル」という部分を造語し、さらにこれを架空の祝祭の名として「ケンタウル祭」という造語にしたものと解されてきたのであった。

「ケンタウル祭」の名を星座名由来とするこれらの諸説は、いずれも星座をめぐる「銀河鉄道の夜」からの類推であり、初出の短歌の「ケンタウ

ル祭」をほとんど顧慮していないことが問題であったことを、次節以下で明らかにしたい。

2. ドイツ語と「ケンタウル祭」

前述の短歌を読んだころまでに賢治が学んでいた外国語は英語とドイツ語であり、両者とこの祭の名の関係を考えてみる。まず英語ではケンタウルス座のラテン語綴りをそのまま用いて Centaurus とし、Cを英語の発音で読み、センタウルスあるいはセンターラスが星座名となっている。また、半人半馬一族の名としては Centaur セントールまたはセンタウルとなるが、時には星座名としても the Centaur も用いることがある⁴⁾。また、賢治の時代には、日本ではケンタウルス星座は英語読みのセンタウルスまたはセンタウルを用いることが多かった。例えば、この時代に家庭で広く読まれた天文関係の普及書の小学生全集の山本一清（1929）の文でもセンタウルとあり、賢治が読んだとされている吉田源次郎（1922）の書はセンタウルスを用いているが、1925年発行の理科年表初版などにはケンタウルスとある。

ドイツ語では事情はやや複雑になっている。半人半馬の怪物一族の名は、ギリシャ語の Κενταυροί (Kentauros ケンタウロス) から由来した Kentaur ケンタウルの語が、特に韻文などで用いられるが、一般には、この一族の名は英語の場合と同じように、ラテン語綴りをもとに、Cをドイツ語風にZに置き換えて Zentaur ツェンタウルとすることも多い。しかし、このケンタウロスが星座になった場合の名は、学名のラテン語綴りのままに Centaurus ケンタウルスとするか、der Zentaur とするかはのいずれかである。おそらく賢治は、半人半馬族の名をドイツ語で Kentaur ケンタウルと学び、これに祭を付したのであり、星座名を祭の名としたのではないのである。

全六巻からなり、その語彙の豊富さと解説の的確さで定評のある Brockhaus (1981) の辞書にも、Zentaur の項に語義の1として、ギリシャ神話の "Fabelwesen mit Kopf und Brust eines Menschen

und dem Leib eines Pferdes”、すなわち Kentaur であるとしている。次に2として、天文学の用語として Centaurus（これがケンタウルス座を指している）とあり、ギリシャ語の Kentauros に由来するという。

これらのことから、祭りの名ケンタウルはドイツ語由来であると考えられ、おそらくはドイツ語学習のためのテキストなどに載っていた名前であると思われる。

「銀河鉄道の夜」のなかで、主人公ジョバンニやその友人のカムパネラなどの名をイタリア風にしてはいるが、もし半人半馬族の名をイタリア語で示すなら centauro チェンタウロ⁵⁾であり、星座名なら頭文字を大文字にした Centauro であるが、賢治はイタリア風にはせず、ドイツ語のケンタウルを変えなかった。

著者の一人リヒタはかつて「銀河鉄道の夜」のドイツ語訳を試みたことがあったが、ラテン語の星座名ケンタウルスに由来するという説があることを知らなかったこともあって「ケンタウル祭の夜」を躊躇なく Die Nacht des Kentaur-Fest(e)s と訳していた。

賢治の作品には多くの洋風造語が登場するが、それらの作られ方はさまざまで、大別すると3つの類型がある。それらの作り方を例えば都市名を例にとってみてみよう。

①転用型：欧米の語をそのまま他のものに転用するもの

(例) 人名・海峡名→都市名、探検家ベーリング・ベーリング海峡→ベーリング市

②もじり型：日本の語を欧米風に変えるもの

(例) 日本の都市名→欧風の都市名、仙台（セングアイ）市→セングード市

③由来不明型：既存の語との関係の不明なもの

(例) 由来不明の語→由来不明の都市名、サンムトリ→サンムトリの市

本稿で取り上げた「ケンタウル祭」という語は、このように分類した場合の①に相当する。すなわ

ちケンタウル族というドイツ語の怪物一族の固有名詞を転用して「ケンタウル祭」という祝祭名を造ったのである。つまり「ケンタウル」という部分そのものは（ベーリングが賢治造語ではないのと同様に）既存の語で、これを祭の名とした点（ベーリングを賢治が都市名にしたように）、賢治の創った語、造語なのである。

ここでもう一度、それぞれの語について整理してみよう。

ケンタウロス（ギリシャ語）ギリシャ神話の
半人半馬の怪物一族の名
：オリジナルな用例

ケンタウルス（ラテン語）ローマ神話に取り
入れられた半人半馬の怪物一
族の名
：星座の名前となった。

ケンタウル（ドイツ語）ドイツ語の半人半馬
の怪物一族の名で賢治が用い
ている
：なおドイツ語ではツェン
ウルとも呼び、星座名には主
にこれを用いる

以下において、半人半馬の怪物一族の名は、一般的にはケンタウロスというギリシャ語名で呼び、賢治が用いた語そのものを記す場合はケンタウルというドイツ語名、星座名としてはケンタウルスというラテン語名を用いる。

3. 賢治のドイツ語とドイツへの関心

賢治はこの短歌を詠んだ時期を挟んで盛岡高等農林在学中、ドイツ語学習に熱中していた。またドイツ語で書かれた文学作品も多数読んでいたらしく、賢治の文学世界を支える柱となった。それは例えば次のような事例からもうかがえる。

大正4年春「しめやかに／木の芽ほごるゝたそがれに／独乙冠詞のうた嘆きくる」と賢治は詠い、また大正5年8月には一カ月間、東京独乙学院でドイツ語講習を受けたりしている。この講習のこ

とは短歌にも詠まれており、例えば書簡中に「独乙語の講習会に四日来て又見えざりし支那の学生」などという歌がある。「大正7年5月より」とある歌群のなかにはドイツ語で読んだアンデルセンの「白鳥の歌」にヒントを得た連作があり、その第一首は次の歌である。

「聞けよ」(“Höre、”)／また、／月はかたりぬやしくも／アンデルセンの月はかたりぬ。

この歌には、ドイツ語 Höre が入っているとともに、アンデルセンは、ドイツ語風の発音としてアンデルゼンと記している。(ただし、現代のドイツではアンデルセンと濁らずに発音するのが普通である。)このほか、賢治作品には多数のドイツ語が使われていることが植田⁶⁾ 敏郎 (1989、1990) によって指摘されている。

これらのことから、「ケンタウル」はドイツ語の語彙を用いた可能性がきわめて高いと考えられる。すなわち、賢治が短歌にケンタウル祭と詠んだ際には、彼の念頭には、半人半馬の一族のドイツ語名の Kentaur があつたと解され、前後に星座などのことを詠じた短歌もないことからみても、この場合には星座名のケンタウルスを考えたわけではなかった、と推定できるのである。それは植田敏郎 (1989) がいう「宮沢賢治がドイツに風土的にも親近感を持って、ドイツ語⁷⁾ を好み、ドイツ文学を研究した」ことの一つの現れであろう。

盛岡高等農林学校在学時、賢治がドイツに関心をもった理由は、ドイツ語に魅力を感じたことばかりではない。当時盛岡高等農林の農学はドイツのそれを基にしていたといっても過言ではなく、ドイツ留学の経験をもつ教授たちも多かった。

賢治の師事した關豊太郎教授も、主著『新撰提要土壤学』(1929)の末尾に、日本における土壤研究の基礎が英国人のキンチとドイツ人のケルナーとフェスカによって築かれたとしているように、ドイツ土壤学の流れを汲む学風であった。關は1910年から3年間ヨーロッパに留学したが、そ

のうち約2年はドイツに滞在した。帰国後の講演において關は英仏両国民と比較しつつ、ドイツ人が非常に勤勉なこと、自分の職務を重んじる事、質素で儉約でありながら休暇も楽しむことなどを力説し、學術の研究と普及、その応用や器械など工業製品の品質が優れていること、などを語っており、「われわれが獨逸に學ぶべき點が澤山あります。」(關、1913)と結ぶのである。その二年後に入学した賢治はドイツに学ぶことが多いと同教授からいつも聞かされていたであろう。

4. 歌稿B「大正六年四月」の短歌の周辺

この歌稿Bの「大正六年四月」と記したあとに収められた50首中、この「ケンタウル祭」の歌は13番目に置かれているが、その全50首中に星ないしは星座を詠ったものは一首もない。その前の「大正六年一月」(実質1～3月分)にも星に関わる歌はない。この年の6月には銀河を詠み、前年12月?にはオリオンを詠っているなど、賢治は星座や銀河を詠うことが多いが、ちょうど「ケンタウル祭」の歌が創られた時期を含む約半年は星や星座を詠っていない。

賢治作品には四季のなかで春の星空について記載は最も少なく、いわゆる春の星座のなかではしし座が登場する程度である。さらに、「かゞやきの／そらに鳴る風なれにもきたれ」という部分は、陽光に満ちた春の日中を思わせる。

これらのことも、「ケンタウル祭」の歌は星や星座とは無関係に創られた可能性が高いことを示している。

Ⅲ 賢治と馬と祭り

1. 高農時代の賢治と馬との関わり

もともと半人半馬のケンタウロス族というキャラクターは、ギリシャの人々が恐れた東方の騎馬民族のイメージから生み出されたと言われている。天文好きの賢治が描いた星座の物語のケンタウル祭の名は星座名から造語したとしていたのも無理はないが、その祭の名の初出の短歌には星座

を連想させるものではなく、むしろ、馬と賢治との関わりを考慮すべきである。

なぜなら、賢治の盛岡高等農林学校在学中に詠んだ短歌で歌稿として残されているものは約300首であるが、そのなかに馬を詠んだ歌は、星を詠みこんだ歌とほぼ同じ20首もあるからである。

賢治は馬産地岩手で育ったから、日常、馬を見慣れてはいたが、商家の子であったため、直接、馬に触れる機会はほとんど無かったと思われる。したがって盛岡高等農林学校の飼育管理の実習でおそらく初めて馬を扱う経験をしたのであろう。入学後の最初の2首が「かゝやける／かれ草丘のふもとにて／うまやのなかのうすしめりかな」「ゆがみうつり／馬のひとみにうるむかも／五月の丘にひらくる戸口」と、馬に関するものであることは、入学間も無い賢治が馬から強い印象を受けたことを示している。ほかにも「山山はかすみて繞る／今日はわれ／畑を犁くとて／馬に牽かれぬ」「一にぎり／草をはましめ／つくづくと／馬の機嫌をとりてけるかな」など多くの短歌がある。また、郊外での馬の歌もあり、「野うまみな／はるかに首あげわれを見る／みねの雪より霧湧き降るを」「霧しげき／裾野を行けば／かすかなる／馬のにはひのなつかしきかな」など、馬への親しみを表す歌もある。

そのほか、競馬に触れた「ひしげたる／蓄音機のみへにこしかけて／ひるの競馬をおもひあるかな」、とか「調馬師の／よごれて延びしももひきの／荒稿ばかりかなしきはなし」などの歌もあり、広い意味で馬に関わることの多かった時期を賢治が過ごしていたことを示している。

当時の岩手は道路の物資輸送は荷馬車が主で、冬は馬橇を用い、農耕馬も多く、軍馬や競争馬の産地で、日本最強の騎兵連隊の駐屯地であり、著名な競争馬を輩出したこともある小岩井農場もあった。優れた騎乗には「人馬一体」という称賛の言葉が決まり文句であり、賢治はギリシャ・ローマ神話の数多いキャラクターの中で、特に文字通り人馬一体のケンタウロス（賢治はドイツ語のケンタウルと呼んだ）に関心を持ったのであ

ろう。

2. 岩手の馬の祭と「ケンタウル祭」

前節で述べた高農時代の馬の歌のなかで特に注目すべきは、ケンタウル祭のでてくる「大正六年四月」に続く「大正六年五月」（5・6両月の吟）のなかに「ちゃんがちゃがうまこ」4首（雑誌「アザリア」掲載は7首の連作）が含まれていることである。これらの歌は盛岡郊外の蒼前神社の祭に盛岡へ繰り出す騎馬の歌である。

夜明けには／まだ間あるのに／下のはし／ちゃんがちゃがうまこ見さ出はたひと
ほんのびやっこ／夜明けが／雲のいろ／ちゃんがちゃがうまこ 橋渡て来る
いしょけめに／ちゃんがちゃがうまこはせでけ
ば／夜明けの為が／泣くだあい気もす
下のはし／ちゃんがちゃがうまこ見さ出はた／
みんなのながさ／おどともまざり

これらは他の短歌とは趣を異にし方言で書かれていて、いかにも東北らしい雰囲気であり、これらとドイツ語のケンタウル祭とが結びつく接点は無いようにもみえる。しかしながら、植田敏郎（1989）は賢治の方言を用いた作品が、後述のアルノ・ホルツと共通していることを指摘しており、ホルツはよく方言を用いたが、「この考え方は宮沢賢治はまったく同感であったろう」と述べ、ホルツからの影響があることを示唆している。

賢治が1917年、ケンタウル祭という名を考えたときには、彼は星座から命名したのではなく、半人半馬のケンタウロスの文字どおりの「人馬一体」から「人と馬」の祭をイメージしたと考えられる。その祭のモデルないしは原型として盛岡のちゃぐちゃぐ馬ッこのほかにも、花巻・遠野付近の「駒繋ぎ」など、駒形神社や蒼前社の祭、天王祭、など馬と関わる祭礼や、流鏑馬で有名な盛岡の八幡神社の祭礼などがあったと考えられる。

特に旧暦の端午の節句あるいは新暦の6月15日など、初夏に馬に関わる祭礼が多く、なかでも馬

の守護神を祀る盛岡郊外の滝沢村の鬼越蒼前神社の祭はちゃぐちゃぐ馬ッこ（「ちゃんがちゃがうまこ」の近年の呼び名）という華やかな装束で飾った馬に子女を乗せ、盛岡市内をパレードする行事で知られている。御神体の神像は騎馬の男神である。賢治の時代のちゃぐちゃぐ馬ッこは、現在行われているような日中、若い女性や子どもを騎乗させてゆっくり街の中を巡回する華やかなパレードではなく、早朝、若い男たちが競って蒼前神社へと馬を走らせる豪快な行事であった。

賢治は、植田敏郎（1989）の指摘したごとく、その情景を次節で述べるホルツにならって方言で描いたと考えられるのである。

一方、盛岡八幡神社の秋の祭は盛岡最大の祭礼で、その呼び物は山車の巡行と流鏑馬であるが、特に秋祭の行事である流鏑馬は、日本でも有数の規模と妙技とで知られており、騎乗した射手はケンタウロスを連想させるものである⁸⁾。

賢治は祭好きであった（似内編、1992、宮澤、1999）から、これらの祭に関心を持ち、しばしば見物していたのであろう。

3. ケンタウル祭と欧米の祭との関係

ケンタウル祭という名が欧米の現存する祭の名前ではなく、賢治の創作であることは間違いない。ドイツやイタリアなどヨーロッパの町には「ケンタウル祭」はもちろんのこと、それに類する祭はおそらく皆無であろう。なぜならばヨーロッパの祭の多くがキリスト教に関わるものであり、異教的なものを全面に出した祭は、観光物産振興のためのごく少数のもの、例えばワインの収穫時のバカスに因むもの、あるいはバイキングや巨石文化などに関わるもの以外にはない。

もちろん、馬が登場する祭りはあり、イタリアのシエナ市のパリオ（競馬の意味）祭という有名な競馬レースとか、スペインのヘレス・デ・ラ・フロンテラで行われるポロ、馬術競技、馬車競技などのある通称馬祭り、ドイツのミュンヘン市のビール祭（オクトーバー・フェスト）の花馬車、イタリアのアルツォ市のジオストラ・デル・サル

チーノ祭に中世の甲冑姿の騎士による騎馬槍試合などがあり、後述するようにドイツ語文化圏には復活祭や聖ゲオルグ祭などの騎馬行列などもある。しかしそれらはキリスト教の祝祭日のイベントであったり、歴史的起源をもつ伝統行事であったりする。これに対して「銀河鉄道の夜」のケンタウル祭は乱暴な半人半馬の怪物とされているものを祀る祭礼であり、この種のものは欧米には存在しないのである。

4. ドイツの春～初夏の祭との関係

「わがうるはしき／ドイツたうひは／とり行きて／ケンタウル祭の聖木とせん」の歌は、前後の歌などから、おそらく4月の半ばに詠まれたと考えられるので、「とり行きて／ケンタウル祭の聖木とせん」というのは、ケンタウル祭をその前後ないしはやや後に想定していることになる。

ヨーロッパには古くから3月の春分のころから4月にかけて、その年の農耕の始まりを祝う祭りがあった。3月25日の「マリアの受胎告知」の日などがそれで、復活祭や4月1日の万愚祭などの春の祭りはいずれもこのような性格も合わせもつものである。

春分後の最初の日曜日の復活祭は、ドイツに限らずキリスト教圏における最も重要な祝祭の一つであり、各地にそれぞれ多彩な行事がみられるが、植田重雄（1982）の記しているドイツの一部で催される復活祭騎乗 Osterreiten がちゃぐちゃぐ馬ッこを連想させて興味深い。これは古代ゲルマンから伝わる豊饒祈願の一つで復活祭の早朝に、若者が畑を馬で乗り回したり、あちこちに行進疾駆させるという。所有地であることの誇示の意味もあったらしく、見廻り騎行 Flurumgang ともいうそうである。賢治がこの行事のことを読んでいて、ケンタウル祭を考えたのではあるまいか。

ドイツトウヒについては、賢治は「銀河鉄道の夜」のなかで「クリスマストリイのやうに真っ青な唐檜かもみの木」と書き、「春と修羅 第三集」の無題の詩の一つ「一昨年四月来たときは」と始まる詩の先駆形（「詩ノート」）に「三列青らむク

リスマスツリ」とあり、その部分が「春と修羅第三集」の初期形では「獨乙唐檜の四年の苗も三列冴えて」と置き換えられている。したがって賢治はドイツウヒをクリスマスツリーから連想して聖木としたのであろう。

4月に賢治が季節外れ?のクリスマスツリーを想起したこの例は、1927年4月1日エイプリルフル、万愚節の日付をもち、この詩の第一節は「根を截り／芽を截り／朝日と風と／春耕節⁹⁾の鳥の声」とある。耕作の始まりを祝うドイツの祝祭を意識して、賢治も「春耕節」の名を用いたのではないだろう。

この詩の下書き稿には「聖重挽馬」も登場する。これは山本一生(1996)によると輸入したペルシュロン種であろうと述べている。種馬としての役割を終えて払い下げられた牡馬である。すなわち、「わがうるはしき／ドイツたうひは」という短歌とこの詩には、「春—祭り—(牡)馬もしくは人馬—ドイツウヒ」というセットがみられるという共通点があるのである。

Ⅳ キメラとしてのケンタウロス

1. 賢治作品におけるキメラ

キメラとはギリシャ神話の頭が獅子、胴が山羊、尾が竜(もしくは蛇)、口からは火を噴くという怪物キマイラのことであるが、生物学にこの語が持ち込まれ、接ぎ木などのように、異なった個体のものであるはずの複数の部分を、一つの個体内に合わせてもつものに対して用いられる。賢治が前者を知っていたことはもちろんであるが、後者についても学習しており、おそらくはいわゆる初期短編の一つで夢を題材にしたと思われる作品「あけがた」のなかに、「区分キメラ」という学術用語も用いて「二人の男がその室内に居た。一人はたしかに獣医の有本でも一人はさまぎまのやつらのもやもやした区分キメラであった。」と記し、「区分キメラもつめたくあざ笑った。」とも書いている。

この「区分キメラ」として区分はもやもやして

いるものの複数の人間のキメラがある、と賢治が幻想(夢想)したということは興味深く、いわばジキルとハイドのようなものも一種のキメラと感じていたのではあるまいか。

ここで注目したいのは榊(2000)の「あけがた」成立過程についての考察である。すなわち、この原稿がともに綴じられていた他の作品の日付の1922年1月に書かれたものと推定されるが、その題材は1918(大正7)年7月の体験が主であると榊(2000)が考えているのである。ケンタウル祭初出の短歌が作られた翌年、賢治が研究生の時期に賢治が見た夢を題材にしたことになる。

『春と修羅』の中の「犬」という詩には「犬の中の狼のキメラ」という言葉が出てくる。これは家畜としての犬の中に野獣としての狼が潜んでいることを示している。このほか、詩「はつれて軋る手袋」(『日本詩壇』1巻1号、1933の発表題は「移化する雲」)には「豊んでくらしい丘丘を／春のキメラがしづかに翔ける」とあり、1925、4、2、の日付が付されている。この「春のキメラ」を、恩田(1981)は「冬と春との両方の気分を含んだ季節感」を言っている、と説明している。

しかし、これは単なる季節の変わり目の抽象的な表現ではなく、賢治のいわゆる『春と修羅』第二集のなかの「南のはてが」と始まる無題の詩(1924、10、2、の日付あり)のなかの自らを翼手を持つかのような幻想のように、具体的にその種のキメラの飛ぶさまを幻視したのではなかろうか。

これらの賢治作品のキメラについて大塚(1996)は、キメラを「宗教学的に捉えれば、善と悪の混成、聖性と魔性の併存という問題になり、賢治はしばしばこの点に恐れを抱いた。」と述べている。

ここで、もう一度ケンタウロスすなわち賢治のケンタウルを思い起こしてみよう。青年賢治にとって、理性をもつ人間としての上半身と、獣性の潜む下半身との、キメラのような者と自らを意識していたのではないだろうか。この研究生時代の1919(大正8)年8月の保阪嘉内宛の書簡に「半人」という語があり、半は本などの誤記ではない

かと見られてきた。しかし、栗谷川(1997)は誤記ではないと考え、賢治は自分の肉体としての「われ」も《部分的な半人としての「われ」》であるとした、記している。この「半人」こそキメラの一部、例えば半馬などと合体しているものである、と筆者らは考えている。

「わがうるはしき／ドイツたうひは／とり行きて／ケンタウル祭の聖木とせん」という前掲の歌は、ケンタウル祭がそのようなキメラ的な自己を言祝ぐ祭りとするれば、その自己の聖化を顕すドイツトウヒは単なるうるはしきものにとどまらず、「わが」うるはしきドイツトウヒであったのである。

2. 半人半馬のイメージ

賢治が半人半馬のケンタウロス族のことを何から学んだのかは、不明ではあるが、ギリシャ・ローマ神話については、境忠一『評伝宮沢賢治』の「宮沢賢治所蔵図書目録」のなかに“Venus Lieder”という書があり、植田敏郎(1989)はこの書すなわちドイツの詩人アルノ・ホルツ(Arno Holz)の詩集に注目している。この詩集の初版の題は“DAFNIS. Lyrisches Porträt aus dem 17. Jahrhundert”¹⁰⁾で、牧人ダフニスがヴィーナスとの愛を歌った牧歌という形をとった詩集であった。その後の版には長い副題が付けられ、境は、その副題の一部の Venus-Lieder を抜き出し“Venus Lieder”とハイフンを取った形で記したものである。

このホルツの詩集について、植田敏郎(1989)は「赤裸々な性の描写も所々に見えている。」としてそれらを列挙¹¹⁾し、「察するに『ダフニス』に現れた性の描写も賢治の注目をひいたと思われる。」と述べ、しかしそればかりでなく、『ダフニス』には諸行無常、老少不定などに通ずる点もあるという。

少なくとも賢治はギリシャ・ローマ神話に想を得た詩をこのドイツ語の書で読んでいたのであるが、賢治がドイツ語の他の本でもギリシャ・ローマ神話を読んでいたか否かはわからない。

賢治が日本の春本や浮世絵の春画、欧米の性愛に関する書物を収集していたことはよく知られている。西洋の文化は、キリスト教とギリシャ・ローマ神話との双方を基礎としているが、前者が禁欲的な、厳粛な世界であるのに対し、後者は享乐的で、耽美的な世界である。賢治はその双方に強い関心を抱いたのである。

馬産地に育ち、日常、馬車や鋤を牽く馬を見ていた子どもたちにとって、発情した牡馬の性器を見るのは普通のことで、時には種付けを見た子さえあって男の子たちがその様子を聞き出そうとしたりもする。もちろん、犬猫など他の家畜の場合も目にするが、馬が最も代表的・印象的な性的シンボルとして子どもたちに認識されていた。少年賢治も同様であったであろうが、盛岡高等農林に入学してからの賢治は、農耕馬を扱い、牧馬に触れ、さらに馬の生理生態をよく知るようになっていった。その賢治が、馬と人との密接な関係を具象的に表すケンタウロス族に関心を持つのは当然であり、そして人間の上体を首とし、馬の体を持つケンタウロスが、その神話世界における所業の示すような性的な存在であることに、強くひかれたのであろう。

3. ケンタウロスと南方熊楠

賢治は盛岡高等農林学校在学時に、岩手のちゃぐちゃぐ馬っこなどの祭礼を欧米風のケンタウル祭と呼んだのは1917(大正6)年であるが、その翌年の1918(大正7)年6月発行の雑誌『太陽』には、南方熊楠の「馬に関する民俗之傳説」が載り、その中にケンタウロスに関する文がある。熊楠はケンタウロスをケンタウリと書き、「プリニウスいわく、ケンタウリ騎兵を初む、と。これはギリシアのテッサリアの山林に住んだ蛮民、全身毛深く、時に里邑を犯し婦女を掠めた…」と引用し、テッサリア山林の蛮民が初めて騎馬で戦うことを行い、町や村を襲い、女性を拉致したことを紹介した。彼らが「前体は人、後身は馬という畸形で、男と牡馬の間種とす。」と誤解され、ケンタウリと呼ばれたが、その意は「牛殺しの義」であると

述べている。さらに、「むかしギリシャ中でテッサリアの山民のみ騎馬をよくした時、他の諸民これを半人半馬の異物と思うた。その実テッサリア人いつも騎馬して牛を追捕うる事、今の南米の騎馬牧人（ガウチョス）其儘だったらしく、紀元前四世紀、すでにこれに象った星宿殺牛星（ケンタウロス）の名を書き留めあれば、かかる誤解はよほど以前に生じおったのだ。」（南方、1918、引用は1971年の全集から。振り仮名は括弧内に示した。）と記している¹²⁾。

この『太陽』は当時の知識層によく詠まれており、賢治在学中の盛岡高等農林学校図書館においても、創立4年後の1906（明治39）年以降、継続して購入していた。馬や民俗に関心があり、ケンタウル祭の歌を作った賢治が、翌年発行されたこの雑誌論説を読んだ可能性は高い。

海外から帰国し和歌山県田辺に住んでいた南方熊楠が全国的に知られるようになったのは、1910（明治43）年に神社合祀反対運動で拘留され、続いて『牟婁新報』¹³⁾に寄稿した「人魚の話」が風俗壊乱罪により発禁、罰金刑を受けるという事件のころからである。「人魚の話」は、性的、猟奇的内容のため発禁になったとみられがちであるが、実は神社合祀反対運動を弾圧しようとした地方官吏たちに対する痛烈な風刺もこめられていたのである。人魚には賢治が強い関心を寄せており、アンデルセンの人魚の話をドイツ語で読んでいたらしい。その人魚に関連し、宗教の問題や性的な民俗とも関わるこの事件に賢治が興味をもったことは想像に難くない。

「銀河鉄道の夜」にケンタウル祭の夜のジョバンニの街を「空気は澄みきって、まるで水のやうに通じや店の中を流れましたし…」と書き、そのイルミネーションを「ほんたうにそこらは人魚の都のやうに見えるのでした。」と記した。また、天気輪の柱の丘の上から見下ろした光景を「町の灯は、暗（やみ）の中をまるで海の底のお宮のけしきのやうにとり…」と記している。1925年1月の日付のある詩断片「発動機船」には、「水底の岩層も見え／藻の群落も手にとるやうな／アン

デルゼンの月夜の海を／船は真鍮のラッパを吹いて」とあるのも人魚姫の童話に想を得ているのである。また1928年6月の詩連作「東京」のなかの「光の渣」には東京の街を「青々としてかなしみを食む／あやしい人魚の群が棲む」と詠っている。

賢治の人魚への関心はそれが一種のキメラであることとも関わっているであろう。ケンタウロスが上部が人間で下部が馬体であるのと同じように、人魚も上半身は人体であるが下半身は魚体である。熊楠の文では人魚は人間の男と交わることができるといふ。

賢治は、人馬（ケンタウロス）との雌雄の対としての人魚の存在を思わせる記述を「銀河鉄道の夜」のなかの地上の街の描写に組み込んだのであろう。すなわち、あたかも織女と牽牛が逢う七夕祭の夜のように、地上の雌性の象徴である人魚と、天上の雄性の象徴である人馬とが、ケンタウル祭の夜に、雌雄のキメラとして結ばれるであろうことを暗示しているのである¹⁴⁾。

4. 短歌以降の作品における半人半馬

半人半馬に類するものが登場する作品は、賢治童話「北守將軍と三人兄弟の医者」である。北守將軍ソンバーユーは長年、塞外において、馬上で軍の指揮をしていたため、脚は鞍に、鞍は馬体に張り付いて離れなくなり、それを三人兄弟の医者が出す話である。この奇想天外な発想は半人半馬の怪物ケンタウロス族のイメージから生まれたとみられる。

『春と修羅』のなかの長詩「小岩井農場」（1922、5、21の日付が付されている）の「パート三」には「いま向ふの並木をくらつと青く走つて行つたのは／（騎手はわらひ）赤銅の人馬の徽章だ」とあって「しやくどう」の「じんば」とルビが付いている。颯爽と走る騎馬の人に対してその姿を「赤銅の人馬の徽章」と表現したらしいが、バッジの意味するところは不明である。なお、「小岩井農場 パート八」には「自由射手は銀のそら」とあり、フライシユツツとルビが付されている。ドイツ語で射手、および星座のいて（射手）座ならびに人

馬宮¹⁵⁾はSchützeと言う。

「銀河鉄道の夜」の執筆のころも、もちろん賢治は半人半馬の怪物ケンタウロス族に関心を強く抱いていたので、ケンタウロス族の星座もあることから、一昔も前に考えたケンタウル祭という名前をこの星座めぐりの物語に用いたのであろう。その際、賢治が星座としてケンタウルス座をまず考えたとして一般に解されているが、そうではなく、同じケンタウロス一族の賢者ケイロンの星座であるいて(射手)座を賢治は想起したと思われる。なぜならばいて座は占星術においては人馬宮あるいは騎射宮などと呼ばれているが、その「人馬」という語が「銀河鉄道の夜」に二か所使われているからである。例えば、ケンタウル祭の夜にジョバンニが時計屋の店先に来ると「いろいろな宝石が、海のやうな色をした厚い硝子の盤に載って星のやうにゆっくり循環したり、また向ふ側から、銅の人馬がゆっくりこちへまはって来たりするのです。そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾ってありました。」とあり、おそらくは単なる騎馬像ではなく人馬宮すなわち、いて座のケイロン像であろう¹⁶⁾。

V ケンタウル祭という発想にみる異文化間の相違と類似

1. ケンタウル祭という発想にみる異文化間の相違点

賢治は盛岡高等農林学校生時代に、岩手のちやぐちやぐ馬っこなどの祭礼を洋風に言い換えてケンタウル祭と呼んだのは単なる「見立て」に過ぎなかった。つまり、日本の地域文化を異国のものに見立てて異文化風に呼んでみた、という若々しい発想の産物であり、賢治一人の想いの反映でもあった。

のちに賢治は「銀河鉄道の夜」のなかにケンタウル祭を持ち込む。その際、日本の読者にはこの祭の名がイタリアかどこかヨーロッパの町の祭らしいカタカナ名の祭として受け入れられる、と賢治は考えたのであろう。しかしながら、「銀河鉄

道の夜」が欧米においても翻訳されるようになってくると、海外の読者の多くにとっては現代キリスト教とは全く無縁で、異教的な怪物を祀る祭を示す名前ケンタウル祭に当惑するであろう。

「銀河鉄道の夜」のなかにケンタウル祭を取り込んだとき、賢治の幻想のなかの西欧風の異文化世界にはケンタウル祭のような祝祭が存在する、と賢治は考えていたのであり、この点に賢治の異文化理解のユニークさと限界とが見られるのである。日本の賢治研究者は、賢治の異文化理解について、的確なものであったと考えがちである。賢治の理解にも限界があることが日本の読者にほとんど気づかれなかったのは、それが賢治のみならず読者である日本人一般に共通する限界であったからなのである。

もちろん「銀河鉄道の夜」のなかでジョバンニが靴を脱いで家に入るなどという生活面の描写に日本的なものを入れてしまっている、などという点はこれまでも指摘されている。しかし、我々がここで論じたい点は、文化の根底にあるものの相違が作品に現れている点であり、例えば「銀河鉄道の夜」をケンタウル祭の夜の物語と設定したことが問題なのである。

明治以降、取り入れて来た欧米の文明に幼少のころから触れていることは確かではあるものの、日本人の多くが、欧米文化については単なる知識として教わったり、物質文明という側面に関心を寄せたりして、精神面についてはあまり深く学ばぬまま育つことと、東アジアの多神教的な世界観の中で生活していること、などに関わるのである。洋風の舞台設定の多い作品においても、日本人には賢治の一種のアニミズムによって自分たちの世界観に通ずるものとして受け入れられるが、欧米人の目から見れば西洋風の装いをしている中身は東洋人の文学としての側面も見えるのである。

2. ケンタウル祭という発想にみる異文化間の類似点

前節では日本人にとっては欧米文化の根底にあるキリスト教とギリシャ・ローマ神話との位置づ

けの理解が難しいことを述べた。そのほかにも欧米文化の根底をなしているものがある。それは一神教の浸透以前の古代のゲルマン文化あるいはケルト文化などの土俗的な文化であり、これは日本の文化と相通ずるものがある。賢治がケンタウル祭という発想をドイツ語を通じて学んだもののなかから得たとすれば、古代ゲルマンの習俗の名残をとどめる年中行事などもドイツ語の教科書から学んだ可能性があり、日本、特に岩手の民俗との共通点を見いだしたのではないだろう。

ドイツ語圏における春の民俗には、その年の農耕の始まりを祝い豊饒を祈願する祭りがあったことは先にも述べた。例えば、欧米社会における最も重要な年中行事の一つである復活祭の多彩な行事のなかにも、復活祭騎乗 *Osterreiten* があり、早朝、若者が馬で耕作地を乗り回したり、農道を疾駆させるというドイツ中部のマイン河流域や上部オーストリアの行事があることを植田重雄(1982)が紹介している。同様の騎乗は古代のゲルマン文化地域に広く存在し、キリスト教の復活祭と習合した行事なのである。

また、同じくキリスト教が土俗的な信仰の行事を取り込んでいる例としては、現世において人々を守る聖ゲオルク *Heiliger Georg* の例がある。竜を退治した聖ゲオルクを讃える行事は彼が殉教した日に合わせて4月下旬に行われる。騎士である聖ゲオルクは馬の守護聖者であるため、ドイツのバイエルン地方やオーストリアのザルツブルクでは、農牧地を若者が騎乗して疾駆したり、着飾った馬に騎乗する行進など、いわゆる *Georgiritt* ゲオルク騎行が行われる。同様の行事は、ドイツ南東のフライブルク付近にもあり、植田重雄(1999)は、馬のきよめ *Pferd-Benediction*、馬の祝福 *Pferdesegnung* などと呼ぶところもあると記している。

この季節が、冬季に小屋に収容していた家畜を放牧に出す時期に当たり、馬など家畜の祝福や加護祈願を行うのである。同種の行事を他の聖者の祭として行う例もあり、レンツキルヒでは6月23日に、地方的に崇拝されている聖オイロギウスと

いう馬の蹄鉄や馬具の守護聖者を祭る馬行列があるという。

これらは、蒼前神社の祭(ちゃぐちゃぐ馬っこ)と同様、農耕馬を言祝ぎ、豊饒を祈願するものであり、騎上の蒼前神と聖ゲオルクとは馬とともに生きた農牧民の信仰の対象として共通している。また春の農耕の始まりを祝う若者の祭としての性格があったことも、共通している。

賢治はドイツ語圏における春～初夏のこれらの馬にまつわる古代ゲルマンの土俗的・地方的行事と岩手の民俗とを重ね併せた祭を考え、これにギリシャ・ローマ神話から人馬ケンタウルというドイツ語を用いて、若者の春の高揚感を表す架空の祭を考えたのであろう。

Ⅵ その後の「ケンタウル祭」をめぐるいくつかの問題点

1. ケンタウル祭の変化 ―短歌から物語へ―

「わがうのはしき／ドイツたうひは／とり行きて／ケンタウル祭の聖木とせん」と賢治が1917年に詠ってから、7年以上の年月ののち「銀河鉄道の夜」の先駆形(米地、2009a)が書かれている¹⁷⁾。その先駆形の現存原稿にはケンタウル祭の名はないが、初期形(一)には天上のケンタウルの村が登場する。ここも祭りらしいのだが、その状況を描いてあったはずの原稿は残っていない。

短歌のケンタウル祭が賢治一人の胸の中の祭りで、星や星座と関わらず、単に半人半馬の怪物一族のあったのに対し、物語の中ではあるが、住人たちが集う祭りであり、しかも天上であるので星座を意識している点、ケンタウル祭はイメージが大きく広がったのである。しかしながら、その星座は多くの論者のいうケンタウルス座ではなく、いて(射手)座(人馬宮¹⁸⁾)の祭であると考えられる。

「銀河鉄道の夜」において、ケンタウル祭で賑わうケンタウルの村は銀河の西側のケンタウルス座ではなく、東側のいて(射手)座であることは、このケンタウル町に近づく直前のさそり座に關す

る記述からわかるからである。さそり座の火として記されている主星アンターレスとサソリの体の前半は銀河西側にあり、尾や鉤は銀河のなかに位置する。それを「向ふ岸の野原に大きなまっ赤な火」があり「火の向ふに三つの三角標がちょうどさそりの腕のやうに」並び、「こっちに五つの三角標がさそりの尾やかぎのやうに」並んでいるとあり、ケンタウルスの村が「こっち」側のいて座近くにあることは明らかである。

なぜケンタウルス座ではなく、いて座だったのであろうか。それは、花巻付近ではケンタウルス座はほとんど見られないからであろう。これについては、南天の地平線上にケンタウルス座の一部がみられる時期がある、という記述もみられるが、筆者の一人米地は、岩手県より南の一関において天文に関心をもつ少年時代を過ごしたが、ケンタウルス座を確認したことがなかった。南天すれすれなので地上の明かりや山、雲などに遮られて姿を認めることは極めて難しいのである。たとえケンタウルス座の一部が見えたとしても、祭を行おうと考えつくほどのインパクトがあるとは考えにくい。ケンタウルス星座の全体は見えず、最も明るい α 星も β 星も見えない。わずかに上半分のみがようやく認められるかどうかという星座の祭りを賢治が考えたとするには無理がある¹⁹⁾。

日本の大半の土地ではケンタウルス星座全体を見るのは難しいが、南欧イタリアの話にしたとすれば、ケンタウルス座はさらに見えにくい。花巻や盛岡は北緯39～40度に位置するが、ローマはもちろんのこと南イタリアのナポリですら北緯40度をはるかに北へ越えており、岩手の緯度に相当するのはイタリアの最南端のカラブリア地方である。したがって「ケンタウル祭」は一部しか見えないケンタウルスではなく、いて座の祭りとするのが妥当であろう。

いて座の方向が銀河の中心であるという米国のシャプレーの説(1917年)を、賢治は知っていたであろうか。原(1999)は「賢治はこの最新知識を知ってはいなかった」というが、果たしてそうであろうか。少なくとも賢治が「銀河鉄道の夜」

を書いていたころ、すでに小学生向けの本(小学生全集62巻『天文の話・鉱物のはなし』)にすら、シャプレーやシールスらの研究によるとしてこう書かれている。「吾々が夏の空にみるいて星座の方へ、六万光年ほど行った所が天の河宇宙の中心なのです。」(山本, 1929)とあり、賢治はむしろ知っていたと考えるべきであろう。

賢治は、短歌段階ではケンタウル祭の名を星座とは無関係な半人半馬族そのものから命名したが、「銀河鉄道の夜」のケンタウルスの村は、日本やイタリアからはごく一部が見えるのみで主部はほとんど見るできないケンタウルス星座ではなく、銀河の中心の方向にあたるいて座を対象に考えていたのである。

2. ケンタウルの持つ男性ないしは雄性的性格

ケンタウル族の多くは乱暴者であるということからみて、「ケンタウル祭」として祭るということに何の意味があると賢治は考えたのであろうか。語呂が良いからという解釈をする人もいるが、賢治好みのカタカナの名前ならば、オリオン、カシオピヤ(と賢治は表記する)、アンドロメダ、などなど、他にも適切なものがあつたはずである。

ギリシャ神話に登場するケンタウルはすべて男性(であり牡)である。もともと遊牧民族の騎馬軍団がモデルであるから当然とも言えるが、彼らケンタウルは普通の人間の女性と交婚できるのである。したがってケンタウル祭とは男性ないしは雄性賛美の祭ではないかと思われる。

一般にはケンタウル族は粗野で乱暴であると考えられており、祭の名に用いるのは奇妙に思えるが、ケンタウロスないしは人馬の男性的な点を捉え男らしさを誇示する祭の名称として、賢治は少年小説「銀河鉄道の夜」のケンタウル祭を考えたのであろう。

地上のジョバンニの町の祭の描写に登場するのは少年ばかりであり、天上のケンタウルの町と祭についての車中の会話はやはり少年の間で交わされており、他のすべての話題に口を挟む「女の子」かはるが、その場面では発言していない。

おそらく賢治は、少年ジョバンニが一人の男として自立するための旅、一人の求道者として法華信仰の無上道を歩み出す契機としての「銀河鉄道」の旅、を描こうとしたのである。その自立のための旅立ちの日を、ケンタウル祭としたのは、賢治自身が若き日に自らの祭として創り出した「ケンタウル祭」の名とイメージとを書き残そうとしたからではなかったろうか。

「銀河鉄道の夜」のケンタウル祭にも、賢治自らの祭、男の祭としての性格も残されていることは、賢治の作詞作曲した「星めぐりの歌」が繰り返され、歌われたり、口笛で吹かれたりしていることからわかる。

3. 「銀河鉄道の夜」に描かれる宗教とケンタウル祭との乖離

「銀河鉄道の夜」初期形の物語はギリシャ・ローマ神話から名を採ったケンタウル祭の夜の出来事という設定である。しかしながら、夢の旅の銀河鉄道は、キリスト教的な空間と、仏教的（法華信仰的）な時間の中を走っている。それは賢治が「銀河鉄道の夜」の主題を、いわゆる教相判釈によるキリスト教と法華信仰との宗教的な深さの比較、としたからである（米地、2009b）。このため、ケンタウル祭の背景であるギリシャ・ローマ神話の世界や、そのまた根源にある古代ゲルマンや岩手の人々の土俗的な信仰と物語との関係は薄れてみえる。

それでも、「銀河鉄道の夜」初期形は、ジョバンニが「ほんたうの幸せ」を求めて生きて行こうと決意する物語でもあった。それは少年が男としての自覚のもとに自らの進路を見いだす物語ともいえる。その旅への出発がケンタウル祭の夜なのである。若き日の賢治が精神と肉体との相克に一方では悩みながらも、他方ではその若々しい一体的な高揚感に満ちて思い描いたのが「ケンタウル祭」であったから賢治は「銀河鉄道の夜」にも持ち込んだのであろう。

しかしながら、キリスト教的な静謐な世界を経て法華信仰の極みに至る旅の物語には、素朴な生

命感にあふれた「ケンタウル祭」はすわりが悪かったのであろう。さらに、この初期形を大幅に改稿加筆した後期形になると、夢の旅の同行者カムパネルラは、地上では既に溺死しており、銀河鉄道の旅は彼が天上へ昇る旅であったという設定に変わる。そのため「ケンタウル祭」という名は一層、不適切になるため、消えてゆくのである。

4. 初期形の「ケンタウル祭」から後期形の「銀河の祭」・「星祭」へ

現在、一般に広く読まれている「銀河鉄道の夜」後期形のなかで、祭の名前はケンタウル祭、銀河の（お）祭、星祭などと書かれており、これらは同じ祭を指すと解されてきた。しかし、ケンタウル祭はジョバンニの住む町の場面と天上のケンタウルの村の場面との双方にあり、この物語が改稿されてゆく過程でジョバンニの町の場面での名前の使われ方に変化が見られる。これを、現存原稿の初期形（三）と後期形の中の用例を掲げて比較してみると次のようになる。なお、章題と「ケンタウル露をふらせ」という唱え言葉は含めない。

ジョバンニの住む町の場面での祭の名称の用例
初期形（三）

「たのしいケンタウル祭の晩なのに」（後期形では削除）

「ケンタウル祭の夜の町のきれいなことは」（後期形では削除）

後期形

「今日はその銀河のお祭なのですから」

「今夜の星祭に青いあかりをこしらへて」

「こんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたり」

「今晚は銀河のお祭だねえ」

初期形（三）には祭の名は「ケンタウル祭」のみが二カ所で用いられていた。しかし、その二カ所とも後期形では削除されている。また後期形で追加された原稿には、三カ所には「銀河の祭」とその類語が、一カ所には「星祭」の語が書かれて

おり、「ケンタウル祭」は全く使われていない。

地上の祭としては「ケンタウル祭の夜」という章題が出てくるのみであり、しかもその章題の中のケンタウル祭も、推敲過程で七星祭、星曜祭などに変える試みをしている。(結局はもとのケンタウル祭に戻した形になっているものの、もしも賢治がさらに推敲することができたならば、「星祭の夜」などという章題にしたのではないかと考えられる。)「銀河鉄道の夜」には九つの章題があるが、他の章題に置き換えようとした痕跡がみられるのは、この「ケンタウル祭の夜」という章題の場合のみである。

また天上のケンタウルの村に近づいた場面では、ジョバンニが「あゝ、さうだ。今夜ケンタウル祭だねえ。」と言い、カムパネルラが「あゝ、こゝはケンタウルの村だよ。」と応じる。このやりとりは初期形にも後期形にもあるが、その後に続くべき天上のケンタウルの村の祭の場面の原稿は欠落している。これは後期形執筆に際して賢治の手で破棄されたとみられ、おそらくは欠落部分の前後のケンタウルの村とその祭の断片的部分も削除される運命であったと考えられる。

賢治は晩年の「銀河鉄道の夜」の初期形に性に目覚めるころのイタリア名の主人公ジョバンニ少年が恋いや孤独感から解き放たれて、一人前の男になってゆく、その自覚・自立に至る物語にふさわしい設定として、賢治がかつて若き日の高揚感を詠った「ケンタウル祭」の夜ということにしたのであったろう。また、初期形はキリスト教と法華信仰との比較(教相判釈)が大きなテーマであった(米地、2009b)から、南ヨーロッパ的で非キリスト教的な「ケンタウル祭」の名が適当と考えたのでもあったと思われる。

しかしながら、賢治はこの設定を組み込んでみたものの、後期形に改稿し、友カムパネルラの死を暗示して終わる静謐で悲哀に満ちた物語と変えていった時点では、「ケンタウル祭」の名は、もはやこの物語になじまないことが賢治にも感じられ、結局は、削除されたり、「銀河の祭」や「星祭」という名が加えられて、「ケンタウル祭」の

イメージは希薄になってゆく。賢治は結局、未完のままの原稿を遺して没してしまい、省かれるべき「ケンタウル祭」の語が部分的に物語に組み込まれたまま、読まれているのである。

おわりに

賢治は盛岡高等農林在学時に、岩手のちゃぐちゃぐ馬ッこなどの祭礼から発想を得て、自らの高揚する春の気分と強い男性的な欲求とをドイツ語を用いてケンタウル祭と呼び、短歌に詠み込んだ。したがって、この段階では、賢治自身のための祭、賢治ひとりの胸のうちの祭の名であった。

しかし、晩年、賢治は「銀河鉄道の夜」という少年のための物語の初期形のなかに、このケンタウル祭を取り込もうと試みる。若き日の漲る高揚感を示す「ケンタウル祭」の名を、少年の自覚や自立を言祝ぐ祝祭の名としようとしたのである。しかし若き賢治の心身の煩悶を表すケンタウロスの名を、少年たちに誤解なく伝えることは難しく、多くの点で物語になじまなかった。さらに最晩年の賢治がその「銀河鉄道の夜」を哀切な後期形に改稿してゆくと、この名は一層、物語に不適切になったため、推敲過程で、地上の祭については、ケンタウル祭の語を削除して、星祭、銀河の祭りに置き換え、天上の祭の情景が書かれた原稿は廃棄してしまった。現在は「ケンタウル祭」の名は断片的に二か所に残るのみであるが、もしも賢治にさらなる改稿の時間が与えられたならば、おそらく全てが抹消されてしまったであろう。

謝辞

この論文を構想、執筆するに当たり、古くは故力丸光雄教授から、最近の細川真悟君まで、多くの方々のご教示やご協力を賜り、なかでも三浦修氏からは、多くの適切な助言やご指摘をいただきました。これらの方々に篤く御礼申し上げます。

注

- 1) 賢治はこれらの短歌ではドイツウヒを「ドイツたうひ」と記しているほか、後年の「修学旅行復命書」や短編「チューリップの幻術」、詩「路の根をとったり」などには「獨乙唐檜」と記し、書簡（富手一宛て、1927）に「ドイツ唐檜」と書いた例もある。
- 2) 複数形では *Kentauroi* (Kentauroi ケンタウロイ) となり、シャーデヴァルト (1956) を訳した河原 (1963) はこの呼称を使っている。
- 3) ラテン語文法では所有格という言い方をすることはほとんどないが、語尾が *-us* と終わる男性名詞の場合、属格として *-i* で結ぶ。所有や帰属、説明、同格、部分など多くの意味を持つ。多くは部分を表す場合で、例えばケンタウリ α は、ケンタウルス座の α 星であり、部分でもあり帰属とも言える。ケンタウルスの祭としてケンタウリ祭とすることもできるであろうが、わざわざ「一り」を「一ル」と変える必要はないであろう。
- 4) 例えば英語への翻訳の場合「ケンタウル祭」は、Strong (1991) および Strong & Colligan-Taylor (2002) は “the Centaurus festival” と訳し、Bester (1992) は “the Festival of Centaurus” (もっとも章題には “the Centaur festival” も使っている)。
- 5) イタリア語の Centauro チェンタウロ (星座名も同じ) も賢治が知っていた可能性はある。なぜならば「銀河鉄道の夜」に影響を与えたと思われるダンテの『神曲』のなかの「地獄編」にも登場しているからである。
- 6) 本研究にあたり同じ植田の姓をもつ二人の先学の著書・論文に学ぶところが大きかった。引用箇所はフルネームで示したが、植田敏郎氏はドイツ語・ドイツ文学の、植田重雄氏はドイツの民族・宗教の泰斗である。
- 7) 近年、奥山 (1997) や梅津 (2005) も賢治の作品の解説にあたってドイツ語との関連を重視すべきことは指摘している。
- 8) 盛岡八幡宮の流鏑馬の特徴の一つは、射手の騎馬のあとをもう一騎、奉行といういわば審判が追尾することである。見事に的を射止めると、後続の奉行は扇子を打ちおぎ「よう射たりヤァ」と誉めそやすのである。これは蛇足であるが、賢治がケンタウル祭をイタリアらしい土地に設定したのは、この「よう、イタリアァ」から連想したなどと考えるのも楽しい。
- 9) 東南アジアや中国などには春耕節の名で呼ばれる祭がある。タイではもともとはパラモン教の祭日であったといい、ワン・ブートモンコンと称し5月8日ごろに盛大に祝う。類似の祭りはカンボジアにもある。また中国で春龍節と呼ばれる祭日も古くは春耕節と呼ばれており、現代においても遼寧省などでは春耕節の名で祝っているそうである。時期的に近いドイツの祭としては5月1日の五月祭 *Maifeier* があり、そのとき五月柱 *Maibaum* として村や町の広場に立てられ、上に花環や飾りのリボンなどを吊り下げる木にドイツウヒも用いられることも指摘しておきたい。多くは白樺の木を用い (植田重雄、1999) モミヤカラマツも使われるようではある。
- 10) 植田敏郎 (1989) 梅津 (2005) の著書におけるこの表題の記載には *Lyrisches* の末尾の *s* が脱落している。
- 11) 植田敏郎 (1989) は、この『ダフニス』では、「薔薇の幕舎」とワグナを形容したり、閨の睦言の描写があったり、「真珠なるわが液」としてスベルマを詠い込んだりしている」と言う。
- 12) 「銀河鉄道の夜」と関わって、この南方の文を引用した先例に岸本 (1987) の報文がある。しかしながら、この文から作品を解く鍵が得られたと岸本は述べているものの、賢治が短歌でこのケンタウル祭の語をこの南方の文よりも前に使っていることには触れていない上、ケンタウリとは牛殺しの意味という南方の記載を踏まえて、「銀河鉄道の夜」の中の第三時を旧刻の丑寅で寅による丑の剋殺とし、これを日蓮遺文の良と結び付け、易の「凶悔の間」になる、と連ねてゆく論には飛躍があり、賛同はできない。
- 13) 『牟婁新報』は進歩的仏教徒毛利柴庵が社長・主筆で、管野スガも勤務していたことがあり、一地方紙ながら、幸徳秋水、堺俊彦、荒畑寒村らが論陣を張る有名紙であった。
- 14) 「ケンタウル (ス) 露をふらせ。」は豊饒を祈る性的な唱え言葉ともいえる。この言葉は、「天よ、露をふらせ。雲よ、義人をふらせ。」というカトリックの待降節の祈りの言葉とも関連し、また旧約聖書の「出エジプト記」にあるモーゼの祈りに応えて主が荒野に露として降らせてイスラエルの民を救う食物となるマナにも関わるものであろう。賢治は開拓の義人による豊かな稔りを祈願する言葉として考えたと思われる。これまで「ケンタウル (ス) 露をふらせ。」という言葉の持つ意味については適切な説明がなされたことはないが、賢治はこのような由来としては多義的であるものの、人々に豊かな収穫をもたらすと言う点では共通するものとして、この言葉を創ったのであろう。
- 15) 黄道十二宮の宮名は、星座名とは別で、主に西洋占星術で用いられる。賢治はこの宮のつく名称も作品に用いており、例えば童話「土神と狐」や同じく「フランドン農学校の豚」や詩などにおうし座に当たる金牛宮の名が見いだされる。
- 16) また、そのあとにジョバンニが「人馬だって球投げだって、誰にも負けない…」云々と書き、のちに削除しているが、この人馬は馬跳びのことと思われ、人馬座にかけた賢治のユーモアのある連想である。半澤 (1980) は「馬跳び」を「人馬を飛び越す馬跳び」と「人馬に飛び乗る馬跳び」とにわけ、後者について解説している。なお、人馬はかつて隠密が障害物を二人が組んで前者の馬跳びの要領で飛び越える時の技の名でもあった。いずれにしても、この場合の人馬は人が馬の形になることを指している。
- 17) 入沢 (1997) は、「銀河鉄道の夜」初期形 (一) は、《着想は1924年の夏で、着手はその秋》とした。筆者の一人米地 (2009a) は、初期形 (一) を先駆形と残余の初期形 (一) とに分離することを提唱しており、米地の区分を採用すれば、この推定は先駆形の着想、着手の時期のことになる。
- 18) いて (射手) 座は、古代にはもちろん西洋占星術の

十二宮の人馬宮と一致していたが、現在では徐々にずれが生じて、人馬宮と磨羯宮との双方にかかることになった。

- 19) ケンタウルス星座には太陽系に最も近い位置の星があるため、これからケンタウル祭の名をとったという説もあるが、賢治はむしろ、最初に太陽系に近い星として距離が測られた白鳥座を意識しており、そのために白鳥の測量旗などというものも考えて初期形(三)に登場させていたのであった(米地、2008)。

引用文献

- 入沢康夫解説(1997) 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の原稿のすべて。宮沢賢治記念館。
- 植田重雄(1982) ヨーロッパ歳時と民間習俗。早稲田商学298.1-80。
- 植田重雄(1999) ドイツ・スイスにおける年間民俗行事研究。早稲田商学。333.1-90。
- 植田敏郎(1989) 宮沢賢治とドイツ文学。大日本図書。
- 植田敏郎(1990) 宮沢賢治とドイツ文学 詩の世界と思想。児童文学世界。90秋。中教出版。
- 梅津時比古(2005) “ゴーシュ”という名前—“セロ弾きのゴーシュ”論。東京書籍。
- 大塚常樹(1996) キメラ。天沢退二郎編。宮沢賢治ハンドブック。新書館。57。
- 奥山文幸(1997) 宮沢賢治『春と修羅』論—言語と映像。双文社出版。
- 恩田逸夫(1981) 賢治における円環・合一の意識。解釈。18。(宮沢賢治論。1.1981。東京書籍。を引用)
- 加倉井厚夫(2008) ケンタウルス座。渡辺芳紀編。宮沢賢治大辞典。勉誠出版。340-341。
- 岸本一雄(1987) 「銀河鉄道の夜」ノート(その3)。弘前・宮沢賢治研究会誌。5.160-168。
- 草下英明(1975) 宮沢賢治と星。学芸書林。
- 栗谷川虹(1997) 宮沢賢治 異界を見た人。角川書店。
- 榊昌子(2000) 宮沢賢治「初期短編綴」の世界。無明舎。
- 斎藤文一・藤井旭(1988) 「銀河鉄道の夜」。「宮沢賢治 星の図誌」。平凡社。
- シャードヴァルト(河原訳。1963) 星のギリシャ神話。白水社。
- 原著:Shadewaldt, W. (1956) Griechische Sternsagen. S.Fischer Verlag.Frankfurt.
- 關豊太郎(1913) 英獨佛三國に於ける所感。岩手学事彙報。949.4-8。
- 關豊太郎(1929) 新撰提要土壌学。西ヶ原刊行会。
- 辻千鶴(2003) ケンタウル祭。西田良子編。宮沢賢治「銀河鉄道の夜」を読む。創元社。17-18。
- 東京天文台編(1925) 理科年表。丸善。
- 野尻抱影(1977) 星と神話・伝説。講談社。
- 似内壮蔵編(1992) 今昔 花巻祭り。花巻開町400年祭実行委員会。
- 萩原昌好(1994) 《テキスト評釈》『銀河鉄道の夜』。国文学 解釈と教材の研究。39.5.54-70。
- 原子朗(1999) 新宮沢賢治語彙辞典。東京書籍。
- 半澤敏郎(1980) 童遊文化史 第一巻。東京書籍。
- 南方熊楠(1918) 馬に関する民俗と伝説。太陽。24。(1971。南方熊楠全集。1。平凡社刊を引用)
- 宮澤雄造(1999) 賢治と祭り。賢治研究。80.9-11。
- 山本一清(1929) 天文の話。小学生全集62巻(天文の話・鉱物の話)。興文社。
- 山本一生(1996) 賢治のサラブレッド—もうひとつの小岩井農場史。宮沢賢治。14.190-199。
- 吉田源治郎(1922) 肉眼に見える星の研究。警醒社。
- 米地文夫(2008) 銀河鉄道はなぜイタリアから発車するか。季刊地理学。60.52。
- 米地文夫(2009a) 「銀河鉄道の夜」六分割論—「楽しき先駆形」と「ありうべかりし第五次稿」の識別—。宮沢賢治Annual。19.157-168。
- 米地文夫(2009b) 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の「乳」のモチーフと「五時五味」の譬え。地域文化研究所報告。10.58-101。
- Bester, J. 訳(1992) Night Train to the Stars and Other Stories. 講談社インターナショナル。
- Brockhaus, F.A. (1981) Deutsches Wörterbuch in 6 Bänden. Brockhaus, Wiesbaden.
- Strong, S.M. 訳(1991) Night of the Milky Way Railway.
- Strong, S.M. & Colligan-Taylor, K. 訳(2002) Masterworks of Miyazawa Kenji. 国際言語文化振興財団。

なお、賢治作品からの引用は(校異も含めて)『新校本宮沢賢治全集』(筑摩書房)に拠った。

(2009年6月30日原稿提出)

(2009年9月18日受理)

The origin and meaning of Miyazawa Kenji's "Kentaur-Festival" : Miyazawa Kenji's tanka, his "Night of the Galactic Train" and German language and culture

Fumio Yonechi and Uwe Richter

Abstract

In "Night of the Galactic Train", one of the most famous works of Miyazawa Kenji, a festival with the strange name "Kentaur-Festival" appears. The central theme of the story is a dream about a journey to the stars, and so the name of the festival is interpreted as being related to the Centaurus-constellation. But this name appears for the first time in a tanka, written by the young Kenji, and in terms of content and time it has no connection with the constellation. In our understanding it is the figure of Kentaur, the German name for the half-man-half-horse figure of Greek mythology, who gave his name to the festival. When he was young, Kenji read about horse-breeding and the German language, and the "Chagu-chagu-umako" festival and other events of the horse-breeding culture of Iwate gave rise to the Kentaur-festival.

Furthermore, being interested in the figure of chimera, Kenji took the Kentaur with its upper half of a man and lower half of a horse as a metaphor of the conflicts within himself between reason and sexual instincts. Like in Iwate, there are festivals in Germany too, where in the early spring horses are blessed in the hope of a rich harvest. Kenji probably knew about this folklore and gave expression to the high feelings of his youth in the festival of the Kentaur. Later in his life, when he wrote the early drafts of "Night of the Galactic Train", he mentioned the Kentaur, but ultimately it did not fit to this quiet story for young readers, and so he took it out. What was left was the name of the festival, but the image of the figure itself faded.

Key words

Miyazawa Kenji, Kentaur-Festival, tanka, "Night of the Galactic Train", chimera, German language, German culture